広報 るもい

◆連載 いま留萌むかし

・みなと留萌の誕生（二）

昭和八年（一九三三）三月幾多の困難をのりこえて、留萌港が完成した。明治四十三年（一九一〇）の着工から足かけ二十四年の歳月と国費一千五万九百六十三円八十三銭の巨費を投じた一大難工事が完成したのである。

その年の八月、留萌町内一流の割烹「日勝亭」の大広間に集まった人々の顔は、みんな嬉々として将来の希望に輝いて見えた。ただ、一部の町民のなかには大留萌建設事業の町債問題が解決しておらず素直に喜べないところがあったらしい。

大留萌建設事業とは、留萌築港に伴って、留萌町を名実ともに道北の港湾として発展させるために、大正九年（一九二〇）四月に立案されたものである。その意図は築港後の物資流通の円滑化を図るための市街地改造計画であった。

その概要は、

一、留萌川の切替工事
二、副港建設工事
三、市街地区画整理
四、排水溝築設工事

であった。これに要する経費二百五十万円を、すべて町債（借金）で賄おうという計画であった。

しかし、一口に二百五十万円といっても、どんなに大きな金額であるかおわかりいただけないであろう。当時、府や県でさえ、五十万円の起債を国に認めてもらうことは困難な状況にあった。それが、北海道の小さな町にすぎない留萌町が二百五十万円もの町債を起すことなど不可能と言わねばならない。

ところが、この不可能が可能になったのである。当時、中央では原敬の政友会内閣が成立したばかりであった。内相時代に留萌築港に尽力のあった原が首相になったことは留萌にとって幸運であった。彼の腹心の高橋光威内閣書記官長の部下であった野本治平が留萌町長に就任し、この不可能と思われた町債を実現させてしまったのである。野本町長は就任以来、ほとんど東京にあって東奔西走し、その熱意は当時の政財界を動かし町債二百五十万円は生命保険会社十三社の共同出資となった。

大留萌建設事業は大正十一年四月着工し、大正十三年十二月完成した。

しかし、順調に見えたこの事業も後に大問題を残した。町債の償還が不能に陥ったのである。というのは、築港工事が世界的不況で影響を受けた国家財政の窮乏と、突発した関東大震災の影響を受けて工事費の配分が大幅に削減された。その結果、工事が遅れ留萌川の埋立によって、造成された土地が売れなかったためであった。

このため、留萌町は世間から悪口雑言を言われ、国会でもとりあげられるといった事態にまでなった。当時の荒木町長の自殺までに発展している。ただ、留萌町民の救いはこの町債が町民になんら負担のかからぬように仕組まれていたことである。町債の償還財源は、造成土地代金と入港税のみとし、租税収入によってはならないこととなっていた。起債時の周到な配慮が見られる。

この問題も留萌築港の完成によって償還が可能になり昭和九年には円満解決している。

昭和十一年二月、中国汽船永原丸が外国船として初めて入港し、名実共に国際港として開港した。

築港前の留萌川河口

●特集 高規格道路はまちがいなく市民生活を変えます

昭和62年8月／発行・留萌市
編集・総務部秘書企画課
印刷・株式会社 留萌新聞社

人の動き　男17,015（増126）・女17,773（増13）・合計34,788（増139）　世帯数13,020（増65）　6月末現在